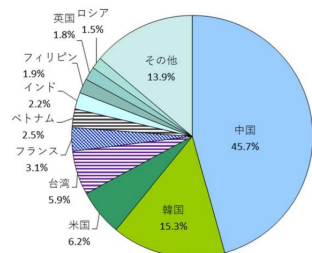
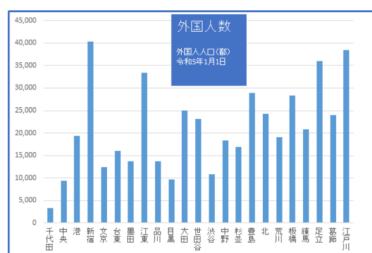


官学民の連携を考える講演と座談会

そこで、千代田区で多文化共生推進に取り組んでいらっしゃる講師をお迎えし、それぞれの立場から現状と課題、また、大学生と社会参加の展望についてお話をいただきました。



千代田区の外国人住民の出身別比率（2022年）
出典：千代田区地域福祉計画 2022 p.87



東京23区の外国人住民の人口（2023年）
出典：特別区協議会ウェブサイト
<https://www.tokyo-23city.or.jp/chosa/tokei/joho/setai2023.html>

TOPICS! 外国人の困ったとは？現場からの報告
新居みどりさん NPO法人国際活動市民中心（CINGA）

TOPICS! 千代田区の在住外国人概要
北村麻未さん 千代田区役所 国際平和・男女平等人権課 国際交流専門員

TOPICS! 千代田区社会協議会からみえる千代田区の現状
小川英人さん、千代田区社会福祉協議会ちよだボランティアセンター

コメンテーター 関水クリスティーナさん NPO法人国際活動市民中心（CINGA）



ボランティア支援と外国人支援

相談件数（ちよだボラセンの個別ボランティアコーディネート）

	令和5年度	令和4年度	令和3年度	令和2年度
新規相談	25件	14件	6件	3件
外国人住民の 困りごと	9件	4件	1件	0件

↑千代田区社会福祉協議会による外国人支援（小川氏の資料より）

↑ 講義科目：多文化共生論（担当：小林）の受講生150人が、グループワークを通じて積極的に話し合いました。

多文化共生

講演後に実施した座談会では、大学の学びが地域社会にどのように結びつくのか、大学生に期待される役割と社会参加の展望、今後の連携の可能性について意見を交換しました。

〈パネリスト〉 ●新居みどり (NPO法人国際活動市民中心CINGA)
▲北村麻未 (千代田区役所 国際平和・男女平等人権課 国際交流専門員)
◆小川英人 (千代田区社会福祉協議会ちよだボランティアセンター)
★関水クリスティーナ (NPO法人国際活動市民中心CINGA)
〈司会進行〉 ☆小林 貴徳 (専修大学国際コミュニケーション学部)

◆小林：講演に引き続いて、千代田区における多文化共生のいまについての意見交換を進めたいと思います。最初に、区役所での取り組みについて北村さんにお話をいただけますか。

▲北村さん：私が担当するのは英語への翻訳が多いです。区内の看板やチラシを翻訳したり、あるいは大使館からの表紙訪問やイベントがあるときの通訳に入ったり、という業務です。また、多文化共生に関する業務では外国人住民向けにやさしい日本語でウェブサイトを作ったり、ボランティア養成講座の企画や運営をしたり、くわえて、ボランティアの方や区民の方と外国人の方を結びつける手伝いをしています。

＊小林：先ほどのご講演では、千代田区には約4000人の外国人が居住していて、出身地別に中国、韓国、台湾が多く、次いでアメリカ合衆国、ベトナムやミャンマーといった構成だと伺いました。いまお話しにあった、英語での対応というのは、英語以外にも複数言語での対応があるという理解でよいでしょうか。

▲北村さん：はい、区の公式ウェブサイトや区報は多言語対応していますし、窓口でも通訳タブレットを使って英語以外の複数言語での対応があります。ただ、外国人=英語と考えてしまう傾向も残っているので、先日、小学校教育付するプリントの英訳依頼を受けたので、「多くの外国人生徒は中国籍ですよね」と確認したところ、「ちょっと言語を確認します。」というやり取りがありました。

※小林：英語の案件に関しては区役所で対応することが多いということですが、そのほかの言語に関してはいかがでしょうか。千代田区社会福祉協議会には英語以外の相談は寄せられているのでしょうか。

◆**小川さん**：そうですね。母国語という観点で挙げると、圧倒的に韓国語、中国語からの相談が多く、英語圏の人はあまりいらっしゃらないです。千代田区に在住されている外国人比率と同じ割合で相談があるという感じです。

❖小林：先ほど講演でおっしゃっていたように、外国人居住者といってもいろいろな状況の方やルーツの方がいらっしゃるわけですか。

◆**小川さん**：経済的な背景でいえば、富裕層もいらっしゃれば、本当に生活に困っている方もいらっしゃる。外国人住民は多様なんです。そして、言語面でも苦勞されている方、支援の場所を求めている方というのは、やはり経済的に少し困っていて、そこに割くことができる経済的な余力がない方が多いという印象を受けます。

＊小林：小川さんは神保町エリアを担当されているということですが、今のお話は神保町エリアの特徴なのでしょうか、それとも、千代田区内に共通してみられる特徴なのでしょうか。

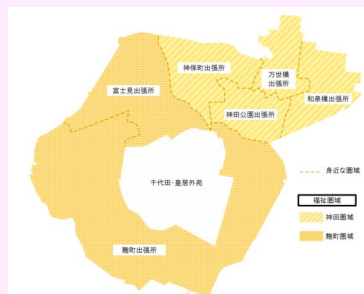
◆**小川さん**：千代田区は大きく麹町エリアと神田エリアという2か所に分けられます。麹町の方が大使館が多かったり、高層マンションがあったり、どちらかという経済的に余裕がある方が住んでいらっしゃるケースがほとんどです。一方、神田の方は下町みたいなところも残ってますし、あちらの方が多分アジアの方々が多いと思います。しかもそんなに家賃の高いところに住んでいらっしゃらなくて、経済的にも少し困っているという印象を受けます。

＊小林：たしかに万世橋あたりを境にして住んでいる外国人の構成が変わるという話を聞いたことがあります。

◆**小川さん**：そうですね。万世橋ってちょうど秋葉原の駅あたりを指します。中央区とか台東区とか上野の方面は、やはり千代田区よりも外国人が多い地域になります。神保町という、ちょうど麹町エリアと神田エリアの中間地点にあたり、私がさっきまたま例に出したのは高級マンションのケースです。



外国人住民は
多様なんです。



↑千代田区の福祉圏域

出典：千代田区地域福祉計画 2022 p.19

★小林：ちよだボランティアセンターは、人と人を結びつけるハブのような機能を果たしています。そこでは大学生も活躍しているというお話も聞きますが、本日の講演で学生の反応を見てどのような印象を持たれましたか。



◆小川さん：私たちが学生さんに期待しているところと、地域社会が大学生に期待しているところって、若干のズレがあると思います。地域の方々は、本当にマンパワーとして見ている方が非常に多いです。大学生は四年間しかいませんが、地域に大学があって、そこの学生さんたちが地域活動に協力してくれるというのは、住民の誇りでもあります。じっさい専修大学もこの界隈の町会の方からとても愛されています。一方、私たちの観点からすると、四年で卒業してしまうので、継続的な関わりというのがなかなか難しいところです。とはいえ一学期待するところは、学生ならではの発想力です。専門的な仕事をしようとしてしまうとどうしても視野が狭くなってしまいますが、本日もディスカッションの中でいろんな意見が挙げられたように、私たちのあいだではちょっとそれ無理じゃないかということも、正解か不正解かに関わらず、こういうふうに考えられるんじゃないか、こんなことできるんじゃないか、私たちが普段気づかないような発想を出してくださるというところがあります。私たちもハッとさせられるところですし、そこにすごいエネルギーを感じます。考えついでから行動するまでがとても早いというのが良い点です。ただし、あえて難点を指摘しておく、と、熱しやすく冷めやすい、ということもあるのかなと思います。

★小林：大学生が区役所と関わるのは何らかの手続きをするくらいで、あまり機会がないのかも知れませんが、北村さんは、学生の反応にどのような印象を持たれましたか。

▲北村さん：そうですね。ボランティア活動を大学の授業の一環にして単位化してしまえば、もっとボランティアに参加するという意見がありました。新しく革新的な発想だなと思いました。でも大学生がたくさん興味を持って、くれて、人生の四年でも三年でも、少しでも経験してくれたらそれはそれでいいかもしれません。大学と連携してボランティアの単位化ができればいいなと思いました。

★小林：今回の講演のように、ちょっとしたきっかけがあることで、相互のつながりが生まれることがあるように思います。このたび、NPO法人CINGAに千代田区の多文化共生についてお話しただきたいとお願いしたわけですが、新居さんはどのように受け取られましたか。

●新居さん：多文化共生というのは現代社会でとても重要なテーマです。ダイバーシティ&インクルージョンとよく関わっており、大学で多文化共生について話すのはとてもいい機会だと思いました。ただ、神保町にあるNPO法人として千代田区が多文化共生の現状について話してほしいと依頼されたので、地域のことを分かっているという団体にも一緒に話してもらえたらと思い、かなりご無理を言って、ふたつの組織から小川さんと北村さんをお誘いしました。九段下で専修大学の学生さんたちと多文化共生を考える唯一の機会になると思いました。私が新宿区や文京区で話すのとは全然違うものです。だからこの1時間30分という時間を一生懸命いものを作りたいという思いがありました。また、ちょっと未来思考で考えたときに、学生さんの新しいアイデアとか、合理的に考えていけばいいことができるかもしれないという、今日の講演から何か将来につながるんじゃないかという期待をすごく持っています。

★小林：素晴らしい機会にいただきありがとうございます。この講演をきっかけにして、ボランティアに関わりたいという学生がでてくるかもしれない。先輩後輩のつながりができれば、大学生の四年間とボランティアによる在住外国人サポートのサイクルが伸び、継続的な関わりができるかもしれない。

●新居さん：そうした活動は学生さんたちの大きなインセンティブとなるようです。じっさいに学生さんが月に2〜3人くらい来られます。話を聞かせてほしいという人々です。彼らが何を考えているかというと、彼らに就労活動は人生を大きく左右することですが、自分の22年間を企業でプレゼンするとき、在住外国人の多文化共生や地域共生に関する活動をしてきたということが、就職活動のなかで非常に大きなインセンティブになると分かっています。そういう人たちが私たちの活動にボランティアに関わってくれています。企業側が求めているのは、勉強ができる力もちろん必要でしょうけど、それ以上に人間力であったりコミュニケーション力であったりするわけです。在住外国人をサポートする課題というのは、それらを全部包摂しているような活動が多いので社会的評価も高くなります。

企業側が
求めているのは…
人間力であったり
コミュニケーション力



↑多文化サロン2024
ボランティア養成講座のポスター
出典：千代田区役所国際平和・男女平等人権課



★小林：クリスティーナさんは学生たちのディスカッションの様子を見たり、参加もされました。どのような印象を持たれたでしょうか。



★関水さん：多文化共生の実現は無理だとか難しいという意見がありましたけど、私の意見では難しくありません。難しいと思われがちですが、それはもしかしたら、相手を知らないからなのかもしれないし、自分でバリアを作っているのかもしれない。日本は島国だから昔の文化が根付いているところがあると思います。私の故郷であるブラジルはすごい広いところだから壁をつくるのは難しいです。日本人はあまりにも、怖い怖い怖い、何でも怖い、知らないことは怖い。壁を取ることで、相手を知ること、自分を見ることが大事なのですが、日本人はあまりに自分を隠す。それは昔から、ブラジルに住んでいる昔の日本人もそうでした。自分のことを全部隠す。自分の悪いことは隠す。自分の良いところしか見せない。私は今でも外国人の視点からそれを感じます。みんな自分を隠す。本来の顔は見せないです。知らない相手を恐れずに心を開いて受入れることが大事です。ただ今日は、学生さんのディスカッションから壁を超えるようなエネルギーを感じました。

★小林：多文化共生を考える学生たちに伝えたいことがあればぜひお願いします。

◆小川さん：就職活動があるので、学生のあいだ自由に活動できるのは2年間ぐらいでしょうか。その中で自分の学びや研鑽を深めるためにも、机上だけでなく、ぜひとも外に出て体験してほしい、それが将来の糧につながるいいかなと思います。

▲北村さん：多文化共生を考えるうえで一番手取り早いのは、自分が外国人になる経験をするということです。一度は外国に出て、圧倒的なマイノリティになって、観光ではなく日々の生活を送ってみる。すると、日本に帰ってきたときに、外国人に対してシンパシーを感じるのではなく、それをエンパシーに高めることができます。たとえば、今日の講演で「やさしい日本語」を知らなかったという学生がいましたが、「やさしい日本語」は勉強しなくても共感力が備わっていれば、その人が日本語が分からないと思えばゆっくりと簡単な言葉で話すわけです。海外に行ったとき、英語がわからぬ相手に全然スピードを落とさずに話す現地人がたくさんいました。それを考えると、街で日本人が外国人にゆっくり日本語を話しているのを見かけます。日本人はそういう優しさを持っているので、そういうところを自覚しつつ共感力を高めていってもらいたいです。

やさしい日本語

どちらがよりたくさんの人に理解されると思いますか？

A

1. 召し上げる
2. 土足厳禁
3. 高台へ避難してください

B

1. 食べる
2. 靴をぬいでください
3. 高いところへ逃げてください

↑やさしい日本語の例（新居氏の資料より）

シンパシーを感じるのではなく、エンパシーに高める

★小林：千代田区の課題は何でしょうか。また、今後こうなれば千代田区はもっと良くなるだろうという点があればお教えください。

●新居さん：多文化共生の政策や取り組みについていえば、じつは千代田区はまだ遅れていると思います。子どもたちが日本語の勉強ができなくて社協さん（千代田区社会福祉協議会）に助けてって言いに行くのは、やはり学校の中でしっかりできていないことがあるのでしょうか。この地域で日本語を教えている活動がたくさんあるかというところでもありません。それが千代田区の課題だと思います。ただその一方で、地域に愛着があったり、文化性があったり、千代田区はある意味で共生がすごく進んでいるとも思います。たとえばわたしたちCINGAがはいっている神保町の神田古書センタービルには、古書店以外にもカレー屋さんのボンディがあるわ、落語カフェがあるわ、外国人支援のNPOやレコード屋があるわというように、ひとつのビルの中にいろんなものがあります。それでいて、お互いになんとか譲りあって、うまく共存できている。千代田区も同じように、この町に愛着を持っている人が多いから「とりあえずこはちょっと我慢しながら、話し合って決めていこうよ」みたいなことができたりするのはおおきな魅力だと感じます。たしかに千代田区の魅力なのですが、しかし外国人の方々もそこに参加しているかというところ、まだまだ弱さがある。外国人の社会参加を応援できるような仕組みがないと、または、外国人住民を代弁できるような人が増えていかないと、もったいないなと感じます。

★小林：そうした、外国人を結びつけたらとか、代弁したりとかいう存在として期待されるのが大学生ということでしょうか。

●新居さん：ここに住んでいる住民ではない、でも大学に通ってきていて町に愛着がある。そういう媒介する人たちが関わってくださることによって、風通しももっと良くなっていくのだろうと思います。

★小林：なるほど。居住者ではない、でも、通学してきていて、そこそこ関わっているという、どっちつかずなのだけれども、それゆえに人を媒介する可能性を秘めているということですね。学生のみなさんに期待したいと思います。本日は、長時間にわたりありがとうございます。



↑神田古書センタービル

ゼミでは、神保町の書店オーナーへのインタビューを通じて、最近の変化、課題、トレンドを探りました。デジタルメディアへの適応や書籍販売の減少、棚を貸し出すシェア型書店といった革新的なモデルが話題に上がりました。カフェの併設、ジャンルの多様化、若者層へのアプローチなどのトレンドが議論されました。課題がある中でも、オーナーたちは神保町の文化的アイデンティティを守るために、適応力と協力の重要性を強調しました。



The seminar explored recent changes, challenges, and trends in Jimbocho's bookstores through interviews with local owners. Key topics included adapting to digital media, declining book sales, and innovative models like shared bookstores where shelves are rented for personalized curation.

Trends such as integrating cafés, diversifying genres, and appealing to younger readers were discussed. Despite challenges, owners emphasized preserving Jimbocho's cultural identity through adaptability and collaboration.

書店インタビュー ①

神保町におけるシェア型書店の概要とコミュニティへの影響

Summary of the Shared Bookstore in Jimbocho and Its Community Impact

概要 / Overview

シェア型書店は、本棚の賃貸収益を主な収益源とする新しいビジネスモデルで、厳しい経営環境への対応策として生まれました。本屋業界における新たな提案として注目されています。

The shared bookstore operates on a new business model, primarily generating revenue through shelf rentals, addressing challenges in the struggling bookstore industry. It serves as an innovative response to current economic pressures.

本棚の所有者とメリット / Shelf Owners and Benefits

店舗の棚の8割以上が契約されており、7割は中年層を中心とした個人、残り3割は企業が利用。個人は好きな本や作家を紹介し、企業はPR効果を得ることが可能です。

Over 80% of shelves are rented, with 70% by individuals, mainly middle-aged, and 30% by companies. Individuals showcase their favorite books and authors, while companies benefit from PR opportunities.

未来とトレンド / Future and Trends

書店は消えることはないが、紙媒体からデジタル媒体への移行や、カフェ併設型など新しい販売方法の導入が必要とされています。

Bookstores are unlikely to disappear, but adapting to digital media and integrating new methods, like café-style spaces, is essential for sustainability.

訪問者数と客層 / Visitors and Demographics

平日の来店者は約40人で、主にサラリーマンが中心。若者の来店は少ないが、来店者の2割が本を購入。About 40 visitors come on weekdays, mainly office workers, with 20% making purchases. Young visitors are less common.

書籍の特徴 / Book Selection

多様なジャンルの本が契約者ごとに個性的に陳列され、小さな個人書店が集まるような雰囲気を提供しています。

A diverse range of books is displayed, tailored to each renter's interests, creating the feel of multiple small, unique bookstores.

ビジネスの維持 / Business Sustainability

書籍販売ではなく棚の賃貸収益に依存。多くの契約者は収益性よりも書籍との関わりを重視。

The business relies on shelf rentals rather than book sales. Most renters value the connection to books over profitability.



コミュニティへの影響 / Community Impact

多様な背景を持つ棚の所有者が地域コミュニティの形成に寄与し、本を通じて新たな文化的価値を生み出しています。

Shelf renters from diverse backgrounds contribute to community building, creating new cultural value through books and fostering connections in the Jimbocho neighborhood.

書店インタビュー ②

神保町における美術古書店の概要とコミュニティへの影響

Summary of an Art Antiquarian Bookstore in Jimbocho and Its Community Impact

概要 / Overview

この美術古書店は、30年以上の書店員経験を活かして独立し、美術古書に特化した店舗としてオープンしました。神保町を拠点に選んだ理由は、その豊かな書店文化と長年培った経験を活かせる環境にあるためです。開業に至るまでには多くの試行錯誤がありました。

This antiquarian bookstore specializing in art books was established by an experienced bookseller with over 30 years of expertise. Jimbocho was chosen for its vibrant bookstore culture and as a place where the owner's knowledge could flourish. The journey to opening the store involved various challenges and learning experiences.

美術古書への焦点 / Focus on Art and Antiquarian Books

店内の約9割は美術書で構成されており、趣味性の高いものから手に取りやすいものまで幅広く取り扱っています。美術書は、本を通じて美術館のような体験を提供し、大きな迫力や作品の全体像を伝えられる点が魅力です。

Approximately 90% of the store's collection consists of art books, ranging from highly specialized to more accessible selections. Art books offer a museum-like experience, providing a comprehensive view of works with impactful presentation.

顧客層と訪問者の傾向 / Customer Base and Visitor Trends

近隣のホテルからの影響もあり、主に欧米を中心としたインバウンド旅行客が多く来店します。彼らは明確な目的意識を持って訪れることが多く一方で、日本人の多くは特に目的なく立ち寄る傾向があり、購入にはつながりにくいとされています。

The store attracts many inbound travelers, primarily from Europe and the U.S., due to its proximity to nearby hotels. These visitors often have specific goals when entering the store, while many Japanese visitors tend to browse casually without purchasing.



美術古書の収集と保存の役割 / Collection and Preservation of Art Books

美術古書の多くは国内から取り寄せています。日本は流通が豊富で、手頃な価格の古書から高額商品のオークションまで幅広い市場があります。古書店は価値を見出し、文化や芸術の遺産を保存する重要な役割を担っています。

Most antiquarian art books are sourced domestically, as Japan has a robust market for second-hand books, ranging from affordable finds to high-value auction items. The bookstore plays a crucial role in uncovering value and preserving cultural and artistic heritage.

美術書の魅力と鑑賞の重要性 / Appeal of Art Books and the Importance of Viewing Art

美術書は、インターネットでは得られない作品の迫力や全体像を伝えるもので、リラックスしながら楽しめる「コーヒーテーブルブック」としても親しまれています。人それぞれの楽しみ方があり、ページを切り取って壁に飾るなど自由な発想が歓迎されます。

Art books convey the power and full scope of artworks in a way that digital media cannot, making them ideal as "coffee table books" for casual enjoyment. They invite personal creativity, such as cutting pages to display or adding notes, reflecting each individual's unique appreciation.

コミュニティへの影響 / Community Impact

この店舗は、美術書を通じて新たな価値を見出し、地域文化の保存と活性化に貢献しています。訪問者や収集者を通じて、国内外の文化的つながりを深めています。

This bookstore contributes to preserving and revitalizing local culture by uncovering new value through art books. It fosters cultural connections both domestically and internationally through its visitors and collectors.

店舗インタビュー ③

神保町における花屋の概要とコミュニティへの影響

Summary of a Florist in Jimbocho and Its Community Impact

概要 / Overview

この花屋は、「都会的でスタイリッシュな花屋」をコンセプトに、顧客のニーズに合わせた花束やアレンジメントを提供しています。神保町の隠れ家的な路地に立地しており、訪れる人々に特別な体験を与えることを目指しています。価格もリーズナブルで、多くの顧客に支持されています。

This florist operates with the concept of being a "stylish and urban flower shop," offering bouquets and arrangements tailored to customers' needs. Located in a hidden alley in Jimbocho, the shop aims to provide visitors with a unique experience. Its reasonable pricing has garnered widespread support.



顧客層とサービスの特徴

Customer Base and Service Highlights

顧客の約8割は近隣の企業や出版社で、パーティーや贈答用の花が多く求められます。個人顧客は自宅用やプレゼント用に利用し、花の種類やデザインに関する相談も頻繁に行われています。特に「くすみカラー」や「ワイルド系」など、トレンドを取り入れたアレンジが人気です。

Around 80% of customers are local businesses and publishers, often ordering flowers for parties or gifts. Individual customers visit for home decoration or gifts, frequently seeking advice on flower types and arrangements. Trendy designs, such as muted colors and "wild" styles, are particularly popular.

花屋と地域文化のつながり

Florist's Connection to Local Culture

この花屋は、商店街のイベントや地域活動に積極的に参加し、地域住民や子どもたちとの交流を深めています。例えば、ハロウィンのイベントでは子どもたちにお菓子を配るなど、地域社会の一員としての役割を果たしています。

The florist actively participates in shopping street events and community activities, fostering connections with local residents and children. For instance, during Halloween events, they distribute sweets to children, playing a role as an integral part of the community.

神保町の街の魅力 / The Appeal of Jimbocho

ユニークな店舗と路地文化 / Unique Shops and Alley Culture

神保町は個性豊かな店舗が多く集まる街で、この花屋のような小規模で独自の魅力を持つお店が、街の個性を支えています。路地裏にあるこの花屋は「隠れ家的」な雰囲気が特徴で、訪れる人々に特別な体験を提供しています。

Jimbocho is home to numerous unique shops, with small businesses like this florist contributing to the district's character. Located in a back alley, the florist's "hidden gem" atmosphere provides visitors with a distinctive experience.

文化と地域の未来への貢献 / Cultural and Community Contributions

神保町のような地域では、小規模店舗が街の活性化に重要な役割を果たしています。この花屋は、花を通じて地域文化を支え、新しい価値を提供し続けています。また、今後はホテルやウェディング装飾など、新たな挑戦を通じて地域の魅力をさらに引き出す計画をしています。

In areas like Jimbocho, small businesses play a vital role in revitalizing the community. This florist supports local culture through flowers, continually offering new value. Looking ahead, they plan to expand into hotel and wedding decorations, further enhancing the area's appeal.

神保町における書店文化の現状、変化、課題と未来

Jimbocho Booktown: Current State, Changes, Challenges, and Future

書店文化の現状と変化 / Current State and Changes in Bookstore Culture

神保町は「本の街」として広く知られ、古書店から専門書店まで多種多様な店舗が立ち並び、文学や文化の中心地として機能してきました。しかし、紙媒体からデジタル媒体への移行が進み、経営環境の変化が書店業界に影響を与えています。その一方で、シェア型書店やカフェ併設型書店のような新しいビジネスモデルが登場し、読者や来訪者に新たな体験を提供しています。

Jimbocho, widely recognized as "Book Town," has long served as a cultural hub with a variety of bookstores ranging from antiquarian shops to specialty retailers. However, the shift from print to digital media has significantly impacted the bookstore industry. In response, innovative business models like shared bookstores and café-style bookstores have emerged, offering fresh experiences to readers and visitors alike.

課題と挑戦 / Challenges and Adaptation

神保町の書店業界が直面する最大の課題は、若者の減少とインバウンド客の依存です。訪れる若年層の減少により、地元顧客の購買力が低下している一方で、欧米からの旅行者は目的意識を持って訪れ、収益を支えています。また、紙の本からデジタルメディアへの移行や物理的な書店の役割の再定義も大きな課題です。

One of the biggest challenges facing Jimbocho's bookstore industry is its reliance on inbound tourists and the declining number of young visitors. While local purchasing power has waned, travelers from Europe and the U.S. with specific goals have helped sustain revenue. Additionally, the transition from physical books to digital media and redefining the role of brick-and-mortar bookstores remain pressing issues.

地域文化との連携と未来への可能性 / Connection to Local Culture and Future Prospects.

神保町の書店は、地域の歴史や文化を反映し、コミュニティの形成に重要な役割を果たしています。特にシェア型書店では、本棚を借りた人々の個性が新しい文化的価値を生み出し、地域社会とのつながりを深めています。未来に向けては、地域住民や旅行者に対する新しい読書体験の提供や、多機能型の書店としての進化が期待されています。

Jimbocho's bookstores reflect the area's history and culture, playing a vital role in community building. Shared bookstores, in particular, foster unique cultural value through the individual personalities of shelf renters, strengthening ties with the local community. Looking ahead, bookstores are expected to evolve into multifunctional spaces that provide novel reading experiences for residents and travelers alike.

神保町の意義と発展の展望

Significance and Development Outlook of Jimbocho

紙媒体の未来が不透明な中で、神保町は文化遺産を保護し、新しい形の文化的価値を創造する中心地としての役割を担い続けています。多様な書店と地域の活気ある活動が共存することで、神保町は次世代に向けた文化と経済のバランスを模索しています。

Amid the uncertain future of print media, Jimbocho continues to play a central role in preserving cultural heritage and creating new forms of cultural value. By blending diverse bookstores with vibrant community activities, the area strives to maintain a balance between cultural and economic development for future generations.



千代田区に関するドキュメンタリーを制作するチームの活動

土屋昌明（専修大学国際コミュニケーション学部教授）

本チームでは、私の指導のもと、専修大学国際コミュニケーション学部学生6名が千代田区内でフィールドワークを進め、スマートフォンを使ってドキュメンタリーを制作しました。中心となったのは、神田のまちの変化を扱うテーマと、神田を舞台に活動している中国からの移民をテーマとする二つのドキュメンタリーでした。前者では、古書店街の店主のかたや一般商店のかた、神田神社の宮司さんなど、神田に古くから居住する住民のかたがたに取材し、どのようにして古いものを残しながら新しいまちを作っていくか、その時に大切なことは何か、を考えようとしていました。後者では、近年マスコミでも注目されている、中国からの新たな移民のかたがたに取材し、どうしてこのような現象が生じているのか、それが千代田区にどんな影響を与えるか、を考えようとしていました。

本稿では、後者の試みについて記します。神田のまちは、もともと明治時代に大学が多く置かれ、学生たちのために書店や食堂も多く建てられました。その学生の中に大量の中国人留学生がいました。専修大学にも多くの中国人留学生が学んだものです。そんな中国人留学生の中から、中華民国や中華人民共和国の国家建設に貢献する人材が出ました。その歴史を知っている人からすれば、神田神保町は中国系の人々（いわゆる華人）にとって一種の「トボス」（集団にとって主観的で特別な意味を帯びた場所）となっています。現在の新移民が神田神保町に集まる現象についても、百年以上前のこの歴史をとりあげて説明する人がいます。



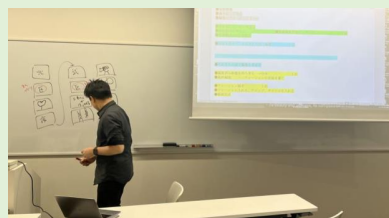
↑ 学士院会館、大学の発祥地



↑ 書店での講演会の様子、講師は土屋教授



↑ 映像編集の授業の様子



↑ 船橋淳監督（本学部客員教授）の指導

神田の中国人コミュニティを取材して

菊池来美（専修大学国際コミュニケーション学部4年生）

今回、千代田学の一環として神保町に新たに形成されつつある中国人コミュニティに関心を持つようになり調査し、短編のドキュメンタリーを制作した。そのプロセスで、私は神保町を中心に活動する三人の中国人移民にスポットを当てた。彼らはそれぞれ違うことに取り組みながらも、共通の目的があって日本にきたという経緯がある。ここではそのうち二人の中国人を紹介したい。近年、中国人移民が増加するという現状の中、神保町の中国人移民の存在が新たに中国人コミュニティを形成しているというの、実に興味深いのではないだろうか。



↑ 菊池来美さんによる卒業研究作品のタイトル

一人目は、神保町で書店を営む趙さん（仮名）である。彼のお店は書店ではあるが、どちらかといえば図書館のように店内で本を読むことができ、会員になれば本を借りることもできる。また、この書店では様々なイベントを開催している。イベントを通して、この書店では文化や思想交流の場を提供しており、書店を訪れる多くの人々にとって必要な場所になっている。書店を訪れる人々の大半は中国人であり、書店の中ではいつも中国語が飛び交っていて、まるでここが中国であるかのように錯覚させられる。しかし、彼らは日本社会に生きており、日本社会に溶け込むために、この書店の講座を通して、日本語や日本社会の常識を学んでいるのだ。このように、この書店では中国人移民が日本で生きる手助けをしており、ここを中心に中国人コミュニティが出来上がっている。書店の店主である趙さんは自由な表現の場を求め、家族と一緒に日本に移住してきた。そして、中国では制限されている自分の表現活動を日本で追及しているのだ。



↑ 書店の様子、机上にあるのは張さんの出版物



↑ 東方書店に出版した本をもちこむ張さん

二人目は、出版社を営む張さん（仮名）である。彼は日本で中国人向けの出版社を開いており、中国語の書籍を何種類も販売している。神保町には内山書店、東方書店など中国に関する書店がいくつかある。張さんは、日々それらの書店に営業を行い、自身の出版社の本を販売してもらうために交渉している。張さんの出版社では「中国では出版できない本」を取り扱っている。本人は、反中国共産党のためにそうしているわけではなく、ただ一出版人として、自分からみて最も価値がある本を出版したいという思いから活動しているようだ。

とはいえ、中国共産党に反対するのではなく、中国共産党の見方と異なるものを扱うことは中国人としてリスクが高く、中国の警察から目を付けられる可能性もある。そのため、彼は自身の活動を広く公には出しておらず、今回のドキュメンタリー制作でも外に公開する場合は顔を隠してほしいとされている。その様なリスクを冒してまで、彼は一出版人として表現活動をしているのである。

この二人が扱う媒体はそれぞれ違うが、共通の目的として「新たな表現活動の場」を求めているのである。彼らは神保町を中心として活動しており、そのため神保町を中心に在日中国人のコミュニティが広がっているのだ。

学生の胃袋

異文化を味わう in 神保町

専大生オススメのアジアンランチ

A スリランカ料理 タップロボーン



テイクアウトもできる！

スリランカ人のシェフが作ってくれる、スリランカカレー！日本ではなかなかお目にかかれない口ティもテイクアウトでうちでも楽しめます:)！

(異文化コミュニケーション学科3年 宮脇 李奈)

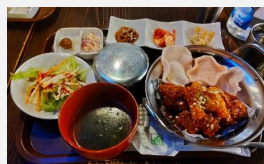
C パキスタン料理 スルターン カレー&ケバブ



スルターン・スペシャリストセットとビリヤニ
ビリッとしたスパイスとバリもちのナンが相性群！！ナンの上に乗っているタンドリーチキンもジューシー！ジャスミン米の香りが際立つビリヤニも旨味の中に感じる辛さがクセになる！

(異文化コミュニケーション学科3年 小清水 理人)

E 韓国料理 KOREAN DINING チョグリ



オススメはヤムニョムチキン定食

韓国の定食に欠かせないおかずも付いていてリユームも満点！チキンがサクサクで絶品です。それでいてお手軽な値段なので大学生のお財布にも優しい！

(異文化コミュニケーション学科3年 高木 史音)

B 中国料理 西安麵莊 秦唐記



1番のおすすめ！油泼(ヨウポー)麵

湯気とともに立ちのぼる香味油の香ばしさ。モチモチの平打ち麺に絡む黒酢ダレが、小麦の甘みと深いコクを引き立てる。とろとろの叉焼が舌の上でほどけ、山椒やネギの爽やかさが後を追う。中国語が飛び交う店内で、まるで本場の屋台に迷い込んだような臨場感。嚙るたびに満たされ、食べ終えた瞬間、もう次のひと口が恋しくなるーそんな至福の一杯をぜひ。

(異文化コミュニケーション学科3年 鈴木 琉世)

D タイ料理 バンコック コスモ食堂



そう、バンコクの屋台の味！パッタイ。

お店に入るとそこはバンコクのナイトマーケット。パクチーとナンプラーの香りが漂い、タイの歌謡曲が流れる。お昼のランチはもちろんだが、夕刻以降のアラカルトはいずれも絶品。とくにおすすめはパッタイです。まさしく、屋台のあの味！

(国際コミュニケーション学部教員 小林 貴徳)



専修大学 国際コミュニケーション学部 2024年度 千代田学

2025年3月31日 発行

発行者 専修大学国際コミュニケーション学部

編集 小林貴徳 (2024年度「千代田学」事業 研究代表)

印刷所 Kinko's Japan

